

「硫黄系薬剤による前凝集沈殿汚泥からのリン、凝集剤回収の
実験的検討および評価」論文要旨

京都大学大学院工学研究科都市環境工学博士後期課程
加藤文隆

本論文は、硫黄系薬剤による前凝集沈殿汚泥からのリンおよび凝集剤回収システムの確立を目指したもので、実験的な検討を行うとともに、最適なリン回収システムの構成および本回収技術の評価を行った一連の研究をまとめたものであり、8章からなっている。

第1章は序論であり、リン回収技術の背景と意義、既存研究のレビューを行い、本研究の目的および意義、ならびに本論文の構成について述べた。

第2章では、各種リン回収技術の特性を把握すること、および、各種リン回収技術の定式化を行うことを目的に、MAP法、HAP法、下水汚泥焼却灰からのリンの酸・アルカリ抽出・回収、ならびに下水汚泥からのリンの加温抽出、超音波抽出および酸・アルカリ抽出・回収について、同一の下水処理場のサンプルを対象に実験的検討を行い、各種リン回収方法の特性を把握した。

第3章では、硫黄系薬剤を用いた前凝集沈殿汚泥からのリン抽出方法の適用可能性を検討することを目的に、前凝集沈殿汚泥および汚泥中に含まれるとされる FePO_4 に対して、各種硫黄系薬剤を添加し、リン抽出実験を行った。 FePO_4 からのリン抽出はpH変化による溶出ではなく、 S^{2-} による還元作用によるものであり、リン抽出には S^{2-} や HS^- を含む薬剤が有効であることを明らかにした。また、リン抽出での最適抽出条件とコスト試算をまとめ、最適なリン抽出薬剤として NaHS を提案した。

第4章では NaHS を用いた前凝集沈殿汚泥からのリン抽出における諸因子(汚泥種類、汚泥濃度、凝集剤添加量、pH)の影響および反応メカニズムを明らかにした。 NaHS の添加により、前凝集沈殿汚泥、し尿汚泥および FePO_4 試薬では、リン抽出率の増加が見られた。少ない NaHS 添加量で高いリン抽出率を得るのに最適な塩化第二鉄添加量は 23mgFe/L と決定した。汚泥濃度の増加にともない、リンの抽出率への影響は少ないが、鉄の溶出率は減少することがわかった。pHが酸性またはアルカリ性域の場合にリン抽出率は増加したが、鉄および重金属類の溶出率も増加したため、最適pHは6と決定した。

第 5 章では、凝集剤添加量の異なる前凝集沈殿汚泥を対象に、リン抽出、リン回収および鉄の溶出・回収についてその特性および最終残さの性状を実験的に明らかにした。リン回収では、全ての汚泥から、リンを約 15%以上含有し、Al 含有量が少なく、重金属類は基準値を満たす良好な回収物が得られた。鉄の溶出・回収では、塩化第二鉄添加量 23~53mgFe/L が最適であり、回収凝集剤は市販塩化第二鉄に比較して同等の性能が得られた。以上より、本システムは塩化第二鉄添加量 23mgFe/L の前凝集沈殿汚泥が最適と決定した。

第 6 章では、反応セル内での *in situ* XAFS(X 線吸収微細構造)分析により、NaHS を用いた前凝集沈殿汚泥からのリンの抽出、鉄の溶出および鉄の酸化における鉄化合物形態の経時変化をみた。リンの抽出では、前凝集沈殿汚泥中の FePO_4 または Vivianite($\text{Fe}_3(\text{PO}_4)_2$)は NaHS と反応し、 FeS_2 および FeS を生成することを明らかにした。鉄の溶出では、 FeS 残さ中の FeS_2 や初沈汚泥由来の鉄の一部を Fe^{2+} として溶出させることを明らかにした。鉄の酸化では、鉄溶出液中の Fe^{2+} が、 H_2O_2 添加により Fe^{3+} に変化することを確認した。

第 7 章では、各種リン回収技術を比較・評価するため、下水処理システムへ仮想的にリン回収技術を適用し、目的関数をコスト、 CO_2 発生量、リン回収量等とした場合について、それぞれに最適なリン回収システムの構成を検討した。リン回収を導入するとき最も運転コストが低く導入しやすいものは脱水ろ液に晶析法を適用したもの、リン資源回収の観点から最も運転コスト等が低く効果的にリン回収可能なものは余剰濃縮汚泥に超音波抽出+Ca 凝集を適用したもの、良好な処理水質が得られ、かつリン回収に伴う CO_2 発生量を少なくできる技術は本回収技術であると考えられた。

第 8 章は、結論であり、本論文で得られた成果について要約した。